

# グローバルMOOCsにおける日本語発音オンライン講座

— 韓国人学習者および教師を対象とした調査から —

戸田貴子\* ・ 千仙永\*\* ・ 伊藤沙智子\*\*\*

〈 Abstract 〉

## Japanese Pronunciation Online Course at Global MOOCs

- A survey of Korean learners and teachers -

The goal of this study is to examine the possibilities of ICT-enhanced Japanese language education in Korea, on the analyses of Korean learners and teachers of Japanese who participated in a Massive Open Online Course (MOOC), 'Japanese Pronunciation for Communication (JPC)'.

Firstly, we reviewed the current situations of MOOCs in Korea. Then we conducted a longitudinal study of 10 Korean learners (5 beginners, 5 advanced) and 3 Korean teachers with teaching backgrounds. Participants submitted a report every week over five weeks after using JPC (5 Sections).

The data of Korean Learners were analyzed from the viewpoint of 1) content understanding, 2) practice methods, 3) teaching effectiveness. The research findings show the following: 1) Approximately 70% of the learners evaluated their content understanding 'well understood', their levels of Japanese. One of the reasons for this result was that they utilized subtitles and translation files. 2) Beginners and advanced learners used different shadowing practice methods. 30% of the beginners used text whereas few advanced learners used text while shadowing. 3) Teaching effectiveness demonstrated noticeable changes in learning attitude and ideas the participants.

The data of Korean teachers were analyzed from the viewpoint of 1) phonological knowledge and teaching experience, and 2) ways to utilize the resources. Suggestions were made to utilize JPC as a supplementary material for the pronunciation class (Teacher A), for different classes depending on levels (Teacher B), and for the purpose of introducing cultural aspects (Teacher C).

Based on the results obtained from this study, we suggest possibilities of making contributions to Japanese language education in Korea in the context of autonomous learning, blended learning, and teacher education.

Field : Japanese Language Education

Keywords : MOOCs, ICT, Online resources, Pronunciation, Autonomous learning

## 1. はじめに

近年、情報通信技術 (Information and Communication Technology: 以下、ICT) の発展によるオ

\* 早稲田大学 教授、日本語教育

\*\* 早稲田大学 助教、日本語教育

\*\*\* 韓国外語大学校 助教授、日本語教育

ンライン教育が世界的に広まっている。本稿は、韓国におけるICTを活用した日本語教育の可能性を検討するものである。まず、本章では、K-MOOC<sup>1)</sup>の現状およびグローバルMOOCsにおけるJapanese Pronunciation for Communication (以下、JPC) の位置付けを示し、本研究の目的を述べる。

## 1.1 K-MOOCの現状

韓国におけるオンライン教育、特に日本語のオンライン教育について、金(2017)は、K-MOOCとサイバー大学<sup>2)</sup>の現状を紹介し、日本語教育の側面から分析している。

金(2017)で報告されている2017年8月当時は全368講座であったK-MOOCの開設講座数は、2019年12月現在までの約2年間で全603講座となり、開設講座数が飛躍的に伸びている。しかし、日本語関連講座数はこの2年間でまったく増えていない。金(2017)が指摘している唯一の日本語関連講座である「日本語文法」講座も、2017年2月の運営終了に伴い受講不可となっており、2019年12月現在まで運営が継続している講座は見られない。このK-MOOCの現状は、金(2017)が「言語教育、特に日本語教育の講座は非常に少なかった」と指摘し、「関連機関及びプロジェクトチームの活発なコンテンツの提供及び講座の開設が必要である」と述べた妥当性を裏付けるものであろう。さらに、金(2017)は、K-MOOCが「大学生・大学院生はもちろん、教授や大学、それから企業や一般市民にまでその対象を広く捉え」ており、サイバー大学が「従来型の一般の大学に入学しない、あるいは、通学ができない学習者への教育」である点に言及している。以上の韓国におけるオンライン教育の現状から、ニーズや学習目的及び受講時間の異なる学習者が、講座やコンテンツ及び受講時間を自由に選択し学ぶことが可能となる、を活用した日本語教育の必要性が指摘できる。

韓国における、K-MOOCに関わる韓国国内学術誌掲載の研究論文（以下、「論文」）の現状は次の通りである(2019年12月31日現在)。MOOCsの論文数は全345本であり、そのうち、K-MOOCの論文数は全111本である。K-MOOCの論文のうち、日本語教育に関する論文は管見の及ぶ限り皆無である。インターネット大国と称される韓国におけるICT活用教育のさらなる発展のためには、MOOCs受講者による内容理解や学習行動について分析し、教育効果を検証することが急務である。

## 1.2 JPCの概要

は、ハーバード大学とマサチューセッツ工科大学の共同開発によるグローバルMOOCsのプラットフォームであるedXにおいて、2016年11月に開講したオンライン日本語発音講座である。本講座は、世界中の日本語学習者・日本語教育関係者に向けて配信されており、現在までに170の国や地域から登録した受講者総数は59,538名である(2020年2月26日現在)。JPCは、グローバルMOOCsによる世界初の日本語関連講座で、公共的に開かれた公開教育資源としての役割を担っている(戸田2017)。JPCは全5回で構成されており、全体像は〈図1〉のとおりである。

1) MOOCとは、Massive Open Online Courseの略である。韓国(Korea)におけるMOOCは、韓国型MOOCとして、K-MOOCと呼ばれている。本稿では、K-MOOC、J-MOOCのように固有名詞を指すときにはMOOCと表記し、グローバルMOOCsのように複数のものを指すときには、MOOCsと表記している。

2) サイバー大学とは、遠隔大学とも呼ばれ、情報通信技術などで形成された仮想空間で講義が行われる大学であり、一定の単位取得により学位取得が可能である。



〈図1〉 JPCの学習コンテンツ (戸田ほか2018)

- 1) 本編講義：講師による講義映像・ゲストによるインタビュー映像
- 2) 会話で学ぶ日本語発音とカルチャー：音声を焦点化した会話教材
- 3) シャドーイング練習用教材：シャドーイング練習に使う音声教材
- 4) 世界の日本語音声教育：各地の日本語学習者の発音上の問題点と学習法・指導法
- 5) 発音チェック：受講者が会話を録音した音声ファイルを提出し、相互評価を行う機能
- 6) 発音フォーラム：受講者による質問・意見交換の場
- 7) クイズ (第1回～第4回) および最終テスト (第5回)

JPCは各回全7項目の学習コンテンツで構成されている。そのうち本研究では、1) 本編講義、2) 会話で学ぶ日本語発音とカルチャー、3) シャドーイング練習用素材、4) 世界の日本語音声教育、7) クイズおよび最終テスト、を本調査における学習および練習の対象とした<sup>3)</sup>。また、4) 世界の日本語音声教育では、中国、韓国、日本、ベトナム、タイで活躍する現職の日本語教師によって日本語学習者の発音上の問題点および指導法・学習法が説明されている。そのうち本研究では、第2回に含まれている韓国語母語話者向けのコンテンツのみ視聴対象とした。

JPCの教材としてのレベルは初級でも利用できるように語彙や文型に配慮した。すべての講義動画や練習問題に字幕・音声翻訳ファイルをつけることにより、受講者による内容理解を促す工夫を施した。

なお、1)の本編講義は、講師による講義が中心となっており、受講者は日本語の音声について学習しつつ、モデル音声を聴き、発音練習を行う。各回の講義内容は〈表1〉のとおりである。

3) 5) と6) は、学習者相互による評価や意見交換による学びの場である。本調査では、学習者によるJPC利用に見られる特徴を分析することが目的であるため、相互評価や意見交換による学びは対象外とした。学習者の相互評価による学びについては、戸田ほか (2018) を参照されたい。

〈表1〉 本編講義の各回における内容 (戸田2016)

第0回 講義概要と 学習方法	講義概要を紹介する回で、本講座のシラバス、各回の講義内容、学習項目、学習方法、評価方法などを説明する。
第1回 発音のポイント	「伝えたい気持ちや内容がきちんと伝わる発音で、日本語が話せるようになること」を目標に、次の五つの発音ポイントを紹介し、発音練習を行う。1) 特殊拍の発音に意識を向け、日本語のリズムの特徴を学ぶ。2) アクセントを意識し、声の高低に注意する。3) 表現意図とイントネーションの関係に意識を向ける。4) 意味のまとまりを意識して発音する。5) 相手との人間関係・話の内容・場に応じた発音を意識する。
第2回 アクセント	アクセントが意味の区別に関わることに気づき、次の三つの学習項目について、発音練習を行う。1) 名詞のアクセント、2) 複合語のアクセント、3) 人名のアクセント。
第3回 イントネーション	表現意図の伝達と理解のためにイントネーションが重要であることに気づき、次の六つの学習項目について、発音練習を行う。1) ～じゃない、2) ～でしょう、3) ～でしょうか、4) ～そうですね、5) ～そうですね、6) への字型イントネーション。
第4回 話しことばの発音	話しことばの発音の変化を体系的に学び、次の四つのグループに分けて、発音練習を行う。1) 拗音化、2) 「い」の脱落、3) 母音の融合、4) 撥音化。また、次の二つの発音の変化についても、発音練習を行う。1) 長音化、2) 促音化。
第5回 発音の達人になろう	「発音の達人」になる方法として、戸田(2008)の研究成果から明らかになった六つのポイントを紹介する。また、大学に入学してから日本語学習を開始したにも関わらず、高度な発音能力を習得し、日本でプロの声優として活躍する劉セイラさんほか、学習成功者によるインタビュー動画の語りから「発音の達人」になる方法を学ぶ。

### 1.3 本研究の目的

本研究の目的は、グローバルMOOCsにおける日本語発音オンライン講座(JPC)を受講した学習者および教師の分析結果をもとに、韓国におけるICTを活用した日本語教育の可能性を検討することである。

まず、学習者がJPCをとおしてどう学ぶかに着目する。学習者によるJPC利用に見られる特徴を分析し、JPCの利用実態を明らかにする。利用実態とJPCに施された特徴・工夫を紐付け、ICTを活用した教育の効果を示す。

次に、教師がJPCをとおしてどう教えるかに着目する。教師のケーススタディーによるJPC利用に見られる特徴および教師により提案されたリソースの活用方法を分析し、ICTを活用した言語教育の可能性を明らかにする。

実際の教室現場では、従来の日本語音声教育における課題として「指導の時間が確保できない」「個別対応が求められる」「指導の方法がわからない」という点が挙げられる。そこで、戸田(2019)では、ICTを活用することによって、解決の糸口が見出せるのではないかと述べた。このような課題を解決するために、学習者および教師の分析結果をもとに、本稿では具体的に韓国の日本語教育現場におけるICTを活用した言語教育の意義を考察する。

## 2. 調査方法

### 2.1 韓国人学習者を対象とした調査

韓国人学習者に、前述した5つのコンテンツを用いた音声学習および報告書の作成を依頼した。調査協力者は、ソウル市内の某大学で日本語を学ぶ大学生で、初級レベル5名および上級レベル5名<sup>4)</sup>である。調査期間は、2018年5月29日から7月8日までの5週間である<sup>5)</sup>。

週ごとに1回分のコンテンツを視聴し、学習および練習に取り組むように依頼した。また、毎回学習後、報告書に次の内容を記入するように依頼した。報告書の内容は、各セクションの視聴時間、練習方法、理解度、教育効果、発音変化の有無、字幕・音声翻訳ファイルの活用などである。なお、学習者を対象とした報告書における使用言語は、質問も回答も韓国語である。

### 2.2 韓国人教師を対象とした調査

韓国で日本語を教える韓国人教師3名を対象とし、所属先および音声科目担当の有無を考慮して、調査協力を依頼した。具体的には、教師Aは大学・音声科目担当有<sup>6)</sup>、教師Bは大学・音声科目担当無、教師Cは高校・音声科目担当無、である。

2018年5月6日から6月9日までの5週間に渡り、毎週JPC（全5回）のコンテンツを視聴後、報告書を提出する調査を実施した。報告書の内容は、動画や音声の再生、講義内容に対する教師の既有知識と指導経験、練習素材の難易度および適切さ、JPCの利用可能性、視聴後の感想などである。

学習者と同様、週ごとに1回分のコンテンツを視聴し、毎週報告書の記入を依頼し、自由記述が多く含まれたデータを縦断的かつ質的に分析した。なお、教師を対象とした調査報告書における使用言語は、質問も回答も日本語である。

## 3. 分析結果

### 3.1 韓国人学習者の調査結果

韓国人学習者が5週間にわたり提出した報告書を分析した結果、各セクションの視聴時間として、各週平均1.8時間<sup>7)</sup>を使って、自宅で講義を視聴していることがわかった。報告書に示された学習者の学びを、内容理解（3.1.1）、練習方法（3.1.2）、教育効果（3.1.3）という観点から、下記に示す。

#### 3.1.1 内容理解

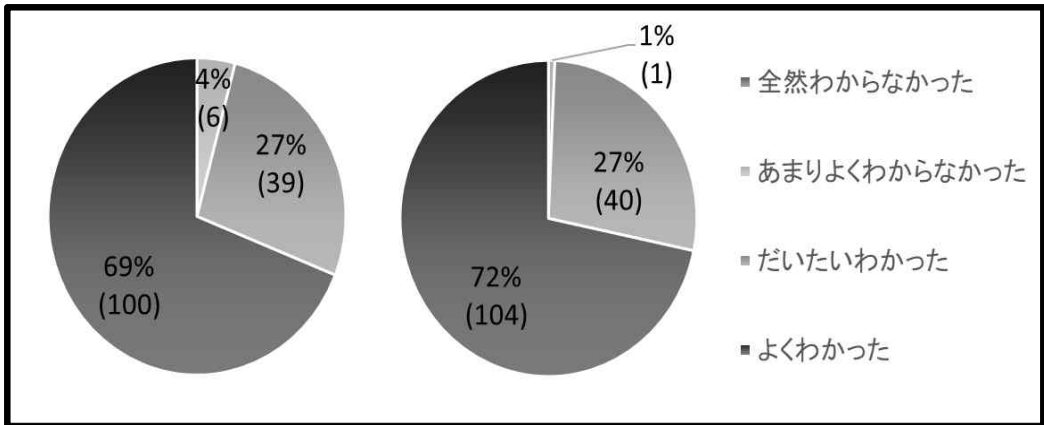
〈図2〉から、全5回をとおして、初級、上級に関わらず、約7割の学習者は講義内容が「よくわかった」と自己評価していたことがわかった<sup>8)</sup>。

4) 学習者が受講する会話授業内で実施した、教師が学習者と1対1の面接形式で行った試験の評価をもとに判断した。

5) 期末テスト期間の1週間は、調査期間から除いている。

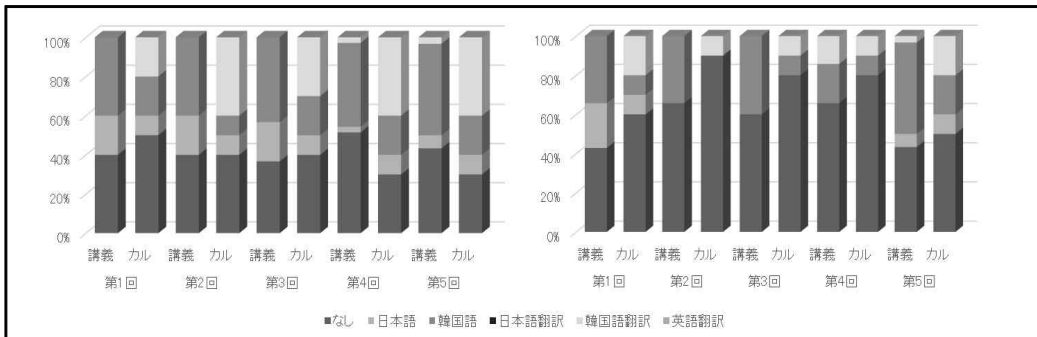
6) 教師Aは、調査実施当時、学部3年対象の日本語発音授業を担当していた。使用教科書は도디디카코(2010) 『일본어 발음』である。

7) JPCにおける各回の再生時間自体は約1時間である。なお、JPCの利用説明画面では各回の学習時間は3-5 hours per weekと記載されている。



〈図2〉 講義の理解度(左初級、右上級)

学習者が講義内容をよく理解できたと自己認識している理由として、学習コンテンツの内容理解を助けるための字幕の利用が挙げられる。JPCは、動画のリプレイ、日本語や韓国語の字幕および音声翻訳ファイルの利用が可能である。学習者の自律学習を考慮したコンテンツの提供により、レベルを問わず、教師不在でも学習を進めていくことが可能になったと考えられる。しかも、〈図3〉から、初級学習者のほうが上級学習者より日本語および韓国語の字幕を多く利用し、韓国語の音声翻訳ファイルも音声学習に取り入れていることがわかる。学習者は内容を理解するために、JPCで提供している字幕や音声翻訳ファイルを自律学習に取り入れていると言える。



〈図3〉 コンテンツごとの字幕利用状況 (左初級、右上級)

コンテンツの内容理解は、報告書の自由記述<sup>9)</sup>における韓国語と日本語の比較からも推察できる。講義の感想を自由に書くようになっている記入欄では、〈表2〉で示したように、母語の韓国語と比較しながら日本語の音韻特徴を言語化している様子が見られた。

8) JPCの講義コンテンツ全29項目(第1回・8項目、第2回・5項目、第3回・4項目、第4回・5項目、第5回・7項目)に関して、コンテンツごとに自己評価の回答を依頼した。初級学習者全5名から全29項目の回答、上級学習者全5名から全29項目の回答が得られ、それぞれの母数は145である。

9) 2.1で述べたように、学習者による報告書はすべて韓国語で記入されている。自由記述は、日本語訳したものであるが、学習者がハングルを用いて日本語の発音を示している箇所は、ハングル表記のまま示す。

〈表2〉 音声の特徴が言語化された自由記述の例

<p>同じ単語でもアクセントによって変わることが不思議だった。特に「トウキョウ(토우쿄우)」と「オリンピック(올림픽쿠)」合わせて「トウキョウオリンピック(토우쿄우올림픽쿠)」になるのを見て、前回は録音した自分の発音が恥ずかしかった。(初級学習者⑥による第2回の自由記述)</p>
<p>「への字型」イントネーションが一番興味深かった。昔話を詠む際、本当にひらがなの「へ」の形にイントネーションが上がったり下がったりした。有意義に活用できそうだ。(初級学習者⑨による第3回の自由記述)</p>
<p>本講義で出てきた文を韓国語に訳して発音してみた。韓国語と日本語のイントネーションは、大体似ていると思いました。しかし、クイズの間4の「そうですか」は、語尾が下がるイントネーションであるのに対して、韓国語の「그래요?」は、語尾が逆に上がるイントネーションのように感じました。(上級学習者⑧による第3回の自由記述)</p>
<p>やはり、実用的な知識を学ぶことができて良かった。特に、日本語で話すとき「センタクキ(센탁키)、スイゾクカン(스이즈국칸)などが発音しにくかったが、「센탁키」「스이즈국칸」<sup>10)</sup>などで発音してもよいことがわかった。(上級学習者②による第4回の自由記述)</p>

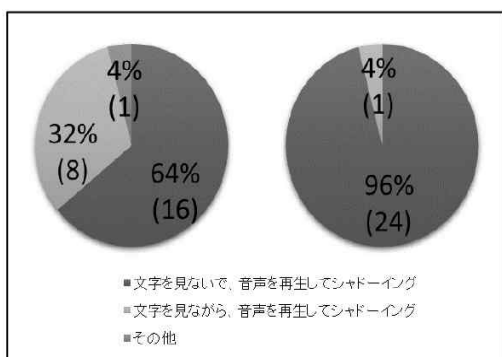
JPCの学習コンテンツのうち「世界の日本語音声教育」は、世界各地の異なる母語（中国語、韓国語、英語、タイ語、ベトナム語）を持つ日本語学習者の発音上の問題点と学習法・指導法を紹介している。そのうち、第2回には「世界の日本語音声教育—韓国編—」が含まれている。韓国語の特徴とともに、韓国人学習者に誤用が多い発音と改善するための練習方法が紹介されている。第2回以降では、〈表2〉のように韓国語と日本語の相違に意識が向けられた自由記述が継続的に見られていた。

### 3.1.2 練習方法

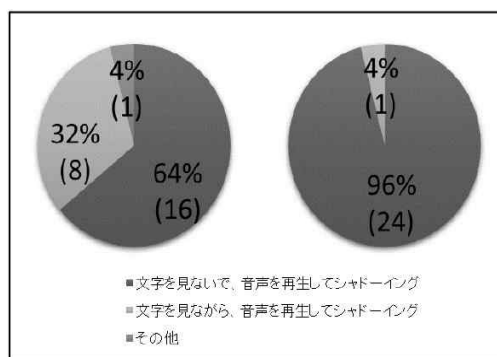
JPCでは、発音の練習方法としてシャドーイングの練習方法を紹介し、毎週シャドーイング練習用素材を提供している。〈図4〉〈図5〉<sup>11)</sup>で示したように、初級と上級では、シャドーイングの練習方法に差が見られ、学習者は独自の練習方法を自ら採用していることがわかった。〈図4〉から、初級学習者の3割が文字を見ながらシャドーイングをしたのに対して、上級学習者の場合ほとんどの学習者は文字を見ないでシャドーイングをしていたことがわかった。また、〈図5〉から、シャドーイングをした後に韓国語の音声翻訳ファイルを使って内容を確認する初級学習者が63%いたことがわかった。このように自分のレベルに合わせて、JPCに組み込まれているコンテンツや機能を駆使して、教師不在でもオンラインで発音を学習することが可能であると言える。

10) 上級学習者②は第4回の自由記述において、日本語の母音の無声化をハングルで表していた。ハングルで「탁」の母音「一」を省いて「탁」と表記し、「국」の母音「ㄱ」を省いて「국」のように表記している。

11) 〈図4〉〈図5〉ともに、初級学習者全5名から各回1回ずつ全5回の回答、上級学習者全5名から各回1回ずつ全5回の回答が得られ、それぞれの母数は25である。



〈図4〉 シャドーイングの方法(左初級、右上級)



〈図5〉 シャドーイングの内容確認(左初級、右上級)

シャドーイングの練習には、プロソディー・シャドーイングとコンテンツ・シャドーイングがあり、両者は目的が異なる。プロソディー・シャドーイングは、音声の特徴に着目した練習方法である一方、コンテンツ・シャドーイングは、意味の理解に着目した練習方法である。本講座は発音に特化した講座であるため、音声の特徴に注目したプロソディー・シャドーイングを推奨している。プロソディー・シャドーイングを推奨することにより、必ずしも意味の理解が優先ではなく音声の特徴に注目した実践が可能である。学習者本人が音声を意識化してシャドーイングを実践できるよう、個々の学習スタイルに合わせて選択可能な字幕・音声翻訳ファイルが提供されている。このことが、プロソディー・シャドーイングの効果的な実践に繋がり、学習者の内容理解へのプレッシャーの軽減に貢献していたと考えられる。しかも、自由記述からわかったのは、JPCのコンテンツ制作意図に沿って、学習者はシャドーイングをする際に、「音声ファイルを聞き直す」「自身の発音を録音して聞き直す」「音声項目に注目してシャドーイングする」「韓国語のように発音する」など、音声に意識を向けた独自の工夫を行っていたという点である。

### 3.1.3 教育効果

JPC使用の教育効果として、音声学習姿勢および音声学習観の変化が挙げられる<sup>12)</sup>。

まず、音声学習姿勢の変化について述べる。例えば、初級学習者⑥は、第3回の講義感想において「自分はかなり失望した」とコメントしており、音声学習においてややネガティブな姿勢が見て取れる。ところが、第5回の講義感想では、「希望を持ちました」「とても励まされました」と述べており、音声学習においてポジティブな姿勢を持つようになったことがわかった。また、初級学習者⑨や上級学習者⑦においても、第5回の講義をとおして、モチベーションが向上したことがわかる〈表3〉。第5回講義で紹介した「発音の達人」のインタビュー動画は、韓国人学習者の音声学習に対するモチベーションを向上させていたと推測できる。学習者は「発音の達人」の発音のなめらかさ、意識の高さ、努力に感心させられ、モチベーションが向上したのであろう。

12) 一般的には、音声の学習効果として音声そのものの変化に焦点が当てられやすいが、本研究では、音声の変化だけでなく音声学習姿勢および音声学習観の変化も広く学習効果として捉える立場をとる。

〈表3〉 「発音の達人」によって促された音声学習姿勢の変化

<p>初級学習者⑥による第3回の自由記述</p> <p>意味の違いを意識しながら発音を区別することが思ったよりも非常に難しかった。練習もうまくできず、自分にかかなり失望した。言葉は理解しても、実際に口で発音するのがそう簡単ではないということにもう一度気付かされた。</p>	⇒	<p>初級学習者⑥による第5回の自由記述</p> <p>6歳以前に学習した学習者は、発音習得の難しさがなく、それ以降は、外国人特有の発音の癖が残るというが、努力すれば流暢になる可能性があることを見て、希望を持ちました。また、インタビューでアニメやニュースなどを見ながら練習し、辛くて諦めたくなるときは独りで悩まずに、世界中の学習者とともに悩んでみてはどうかという言葉にとても励まされました。</p>
<p>初級学習者⑨による第5回の自由記述</p> <p>劉セイラさんのインタビューは、アニメ好きの私にも非常に共感できる点が多く、大きな助けとなった。私が判断するのは申し訳ないが、本当にネイティブの発音であり、全く外国人という感じがしなくて、私もいずれはあのようになれるかもしれないという希望を抱くようになった。</p>	⇒	<p>上級学習者⑦による第5回の自由記述</p> <p>苦勞なしに発音が自然になることはできないことに気が付き、今後、シャドーイングの練習をたくさんしなければならぬと感じました。また、自らの目標を立てて常に発音を気にして練習し、努力している方のインタビューのおかげで、さらに強い意志が湧いてきました。</p>

次に、音声学習観における変化について述べる。「発音の達人」は、学習者にとって、目標設定を更新・変化させ、音声学習のモチベーションを維持させるきっかけとして働いていることがわかった。例えば、〈表4〉で示したように、当初は短時間で発音を上達させたいという目標を掲げていた上級学習者は、第5回では、発音の上達には時間と努力が必要だということを理解し、練習を続けていくという、音声学習観に変化が見られた。

〈表4〉 音声学習観における目標設定の変化

<p>上級学習者⑤による第2回の自由記述</p> <p>良く説明できない微妙な外国人訛りがある。講義が全部終わるまでに、その部分を把握して直せるようになることが目的である。</p>	⇒	<p>上級学習者⑤による第5回の自由記述</p> <p>人より上達するためには発音の達人のように苦勞しなければならない。どのように練習すればいいのかわかったので、これからはたくさん練習することだけが残されている。</p>
--	---	--

学習者が持つ音声学習観に関して、韓国語母語話者というローカルな視点からグローバルな視点への変化が挙げられる。〈表5〉では、上級学習者②が第1回から第3回までは「韓国語母語話者」という視点から音声学習を捉えていたが、第5回では「外国人として」音声学習を捉えるようになった変化が見て取れる。

〈表5〉 音声学習観におけるローカルな視点からグローバルな視点への変化

<p>上級学習者②による第1回の自由記述</p> <p>どうしても韓国語母語話者の特徴があるからか、音の高低がどのように変わるのかを理解しにくかった。</p>	<p>上級学習者②による第2回の自由記述</p> <p>イントネーションは前の講義に比べて、韓国語母語話者にとってより慣れているものだった。韓国でも「그랬요」という言葉を、複数のイントネーションによって異なる意味で言うので理解しやすかった。</p>	<p>上級学習者②による第3回の自由記述</p> <p>これまでの講義では、韓国語との違いが多かった日本語の特徴を学んだ一方、今回の講義の内容は韓国語と似ている点が多く、学びやすかった。</p>	⇒	<p>上級学習者②による第5回の自由記述</p> <p>今回は、これまでとは違って、日本語の発音の特徴よりは外国人として日本語を学ぶ際に気を付けておきたいことを学べてよかったです。</p>
---	--	---	---	--

JPCはedXという世界規模のプラットフォームで展開されている日本語教育コースであり、その目的に合わせて作られたJPCのコンテンツが韓国人学習者を「韓国語母語話者」というローカルな視点から「外国人」としてのグローバルな視点へと視野を広げるきっかけになったのではないかと考えられる。ICTを活用した言語教育により、教室という閉ざされた学習空間を超えて、世界を繋ぐ役割を果たすことができる可能性が示唆された。

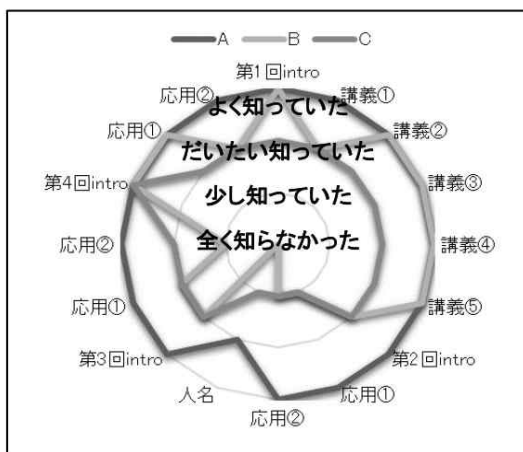
以上、音声学習姿勢および音声学習観の変化のほか、韓国人学習者は講義で得た音韻知識が有効であり、講義で紹介された学習方法が役に立つと捉えていた。また、シャドーイングをとおして、自身の発音が上達していると自己評価していたことがわかった。

### 3.2 韓国人教師の調査結果

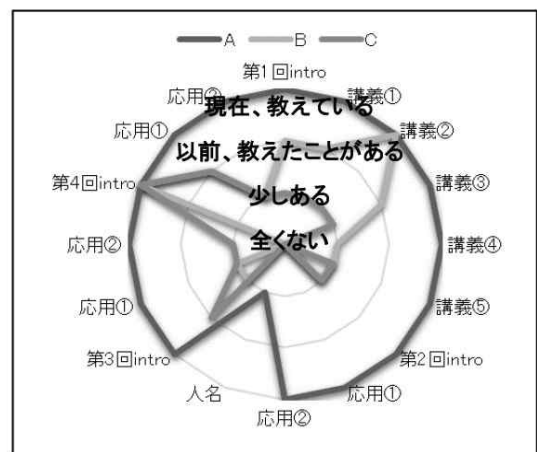
韓国人教師が5週間にわたり提出した報告書を分析した結果、教師3名はそれぞれ次の視点からJPCを受講していることがわかった。教師Aは、音声を教える教師の視点から、JPCを受講している傾向が見られた。教師Bは、学習者・教師両者の視点から視聴後の感想を述べた上で、教師の視点からどのようにJPCを自分のクラスに取り入れるかを検討していた。教師Cは、教師と学習者としての両方の視点から、JPCを受講していた。報告書について、講義内容に対する既有知識と指導経験 (3.2.1)、JPCの利用可能性 (3.2.2)、という観点から、下記に示す。

#### 3.2.1 講義内容に関する既有知識と指導経験

韓国人教師が持っている音声に関する知識および指導経験については、JPCのコンテンツで提示した各回の学習内容を「知っていたか」「教えたことがあるか」という設問で問うた。回答結果は、〈図6〉と〈図7〉のとおりである。以下の〈図6〉と〈図7〉は、それぞれ4段階の選択方式で得た回答について示したものである。それぞれ〈図6〉「知っていた」・〈図7〉「教えたことがある」度が高ければ高いほど円が大きくなるよう示した。



〈図6〉 講義の内容を知っていた



〈図7〉 教えたことがある

教師A (〈図6〉 〈図7〉の最も濃い線で示した最も外側の線) の場合、調査当時日本語の発音の授業

を担当していたため、ほぼすべての音声項目に関する音韻知識があり、授業で教えたことがあると回答している。一方、教師B,C（〈図6〉〈図7〉の薄い線、濃い線）はJPCを受講した時点では、音韻知識が教師Aに比べて少ないことがわかる。このように、3人の教師の知識・経験は異なっていた。

### 3.2.2 JPCの利用可能性

教師A,B,Cが担当している科目や学習者のレベルは異なっており、学習者のレベルまた教科目の到達目標に沿って利用を検討していた。練習素材の難易度については、担当科目の内容や学習者のレベルによって回答が異なっているものの、JPCで紹介している音韻知識や練習方法については、どのレベルの学習者にとってもよい練習になると評価していた。

3.2.1で分析結果を示したとおり、教師Aは、JPCの本編講義で紹介している音声項目に関する音韻知識を持っており、授業でも教えている。そのため、教師AはJPCを、「授業の補助資料」「副教材」「学習者一人で行う復習の材料」として捉えている。学生にはJPCの〈講義〉コンテンツを視聴させ、別の練習用素材と組み合わせてJPCを扱う方法を検討していた。

教師Bは、授業・レベル別にJPCを取り入れることを検討していた。第1回の「発音のポイント」は《基礎日本語》など初級クラスに、第3回の「イントネーション」は《基礎日本語》など初級クラスおよび《メディア日本語》など中級クラスに、第4回の「話しことばの発音」は中上級クラスに取り入れるという、JPCを授業・レベル別に取り入れる可能性を検討していた。具体的には、《基礎日本語》《メディア日本語》など初級・中級クラスで「生きた日本語」「若者ことば」と関連付けて紹介することで日本語への関心を高めることができると述べ、「言語だけでなく、日本の文化（特に、食文化）に触れることができよかった」など日本文化を紹介する素材としてJPCを捉えていることがわかった。

教師Cは、第1回のコンテンツ受講の際に、学校における使用教科書以外の教材使用に対する懸念を述べつつ、学習者のレベルや背景を踏まえ「放課後授業」「授業の始まる場所や終わる場所で、少しずつ見せる」などの授業への取り入れ方を検討していた。また、調査当時に実際の授業で使用している教科書の「お誕生日おめでとう」という単元において、JPCでの「卒業式」のお祝い動画を見せており、日本文化の紹介としてJPCのコンテンツを活用している様子が見られた。

第5回<sup>13)</sup>の講義には、臨界期仮説や大人になってから日本語学習を開始したにも関わらず「発音の達人」になった学習者たちのインタビュー内容が含まれている。これらの「発音の達人」は、学習動機の向上および学習方法の提示という面から、利用可能性が検討されていた。

教師Aは、「発音の達人の経験を聞かせたりしながら、元気付けたい」と述べ、学習者の音声学習の動機付け手段としてJPCの利用を検討していた。

教師Bは、「『発音の達人』になる方法を学習者に紹介したい」と述べ、学習方法の提示としてJPCの利用を検討していた。また、「これまでは自分の授業で発音練習の時間をそれほど持たなかった」とこれまで行ってきた授業実践を振り返り、「これからはここで紹介してもらった方法を自分の授業の中でより積極的に取り入れる予定である」と述べた。発音を授業実践に取り入れることに対する意識や姿勢に変容があったことが見て取れる。

一方、教師Cは、「いままで、わたしは発音がある程度間違っても文脈でなんとかできるだろうと適当に考えていましたが、達人たちの努力と能力に感心しましたし、自分もがんれ(ママ)ばできるだ

13) 第5回では、前述の学習効果（脚注12参照）のうち、音声学習姿勢および音声学習観に関する自由記述が多く得られた。

ろうという期待感ができ」たとし、まずは教師自身の学習観の変容を語っていた。その上で、「生徒たちに映像を見せたあと、翻訳版もみせる」と述べ、そうすることで「生徒たちは、もっと発音に対して、意識を持って近づくようになる」と述べていた。さらに、「このJPCの講座を回り(ママ)の人々に広報したい」と述べ、教室という文脈を越えた教師Cが所属しているコミュニティーにも繋げて活用可能性を検討している様子が見られた。

すべての回における「会話で学ぶ日本語発音とカルチャー」は、発音のみならず日本語授業全般において日本語への関心を高めていくという観点から、利用可能性が検討されていた。教師Aは、発音のクラスではなく、大学1年生を対象とした授業《世界中の日本語》に取り入れることが可能であるとの回答が得られた。教師Bは、《基礎日本語》《会話》《メディア日本語》という初級クラスにも取り入れ、『生きた日本語』または『若者言葉』と関連付けて紹介することで、日本語への関心を高めることができる」と述べた。また、教師Cは、高校の授業《日本語I》において、JPCは「文化の部分は日本の文化も紹介でき、発音の練習もできるので、利用しやすい」と評価していた。具体的に授業内でどのように利用することが可能かについても検討され、JPCにおける選択可能なコンテンツのひとつである「翻訳ファイル」を使用しつつ、JPCの本編講義を見せるという方法が提案された。

このように、教師A,B,Cのケーススタディーから、それぞれの教育環境に合わせた独自の視点から、リソースの活用が提案された。

## 4. 考察

上記の韓国人日本語学習者および教師を対象とした調査の結果を踏まえ、韓国におけるICT活用教育のさらなる発展のために、以下のような視点から示唆が得られた。

### 4.1 自律学習におけるICT活用

韓国人学習者を対象としたJPC利用実態の調査の分析結果(3.1)から、学習者は、自分のレベルに合わせて、必要に応じて字幕や音声翻訳ファイルを利用したり、複数回再生プレーヤーを使用して答えを確認したりするなど、自分のペースに合わせて音声学習を進めていることがわかった。このような学習の継続をとおして、自身の学習活動をモニターし、意識化が促され、音声学習姿勢や音声学習観が変容したことが浮き彫りになった。

使用言語が主に英語であるグローバルMOOCsは言語的障壁により韓国の学習者にとってサービスのアクセス性が劣っているとされるが(국가평생교육진흥원2017, p.102)、逆にICTを活用し、字幕や音声翻訳ファイルが取り入れられることにより、学習者自身が馴染みのある言語で字幕や音声翻訳ファイルを自由に選択できる。このように学習者に自発的な行動を促す仕組みにより、積極的な自律学習の姿勢と行動に繋がったのではないかと考えられる。

本研究の結果から、コンテンツの多様性および自由選択が可能な機能が、学習者に自発的に利用されていたと言える。韓国におけるICTを活用した言語教育は、教師不在の環境下でも、学習者自らコンテンツを選択し利用することで、音声の自律学習を促すことができることが示唆された。

## 4.2 ブレンディッド・ラーニング<sup>14)</sup>におけるICT活用

韓国人教師によるJPCの利用可能性のケーススタディーから、教室内外を問わず、JPCの利用方法は多岐に渡ることが示された。

冒頭でも述べたように、教室における対面授業では、時間的制約により発音にまで手が回らないという現状がある。実際に、3.2.1では、発音に特化した授業がなければ、学習者にとって音声の学習機会は限られていることが示された。しかし、3.2.2のJPCの利用可能性に関する教師一人ひとりの語りにより、発音に特化した授業以外の日本語授業においてもJPCのコンテンツは利用可能であり、学習者の発音学習を促進できることが示唆された。特に、「会話で学ぶ日本語発音とカルチャー」は、文化紹介に焦点を当てて利用することによって、会話や聴解において役立つ音韻知識を併せて学ぶ機会を提供できる。

一方、発音に特化した授業では、音声項目に着目して導入がしやすい環境が整備されており、教師それぞれが置かれている教育環境に合わせて、リソースが活用できるのではないかと考えられる。

本研究の成果により、発音に特化した担当授業の有無にかかわらず、教室内外でオンラインソースを活用することで、韓国においてもブレンディッド・ラーニングによって音声教育を導入できる可能性が示された(戸田2019)。また、教師が音声の専門知識を持っていなくても、ICTを活用することにより、学習者に音声学習の機会を提供できる点が示唆された。

## 4.3 教師教育におけるICT活用

3.2では、3人の教師のケーススタディーをとおして、教師それぞれが置かれた教育環境や状況に合わせて、オンラインリソースであるJPCを利用し、自身の教室にどのように取り入れるかを検討している様子が見られた。担当科目や学習者のレベルの異なりから、教師Aは授業の補助資料としての活用、教師Bは授業・レベル別のコンテンツの活用、教師Cは文化紹介の面からの活用を検討しており、それぞれの教師のオリジナリティが見られていた。

インターネット大国である韓国において、年々増加傾向にあるオンラインリソースを活用し、よりよい教育実践に向けて、その活用方法を検討していくことには意義があると言えよう<sup>15)</sup>。

さらに、教師間のディスカッションを取り入れると、さらにそれぞれの文脈が共有でき、活用可能性のアイデアも互いに広がるであろう。このようなICTを活用した教師教育という文脈において、オンラインリソースは、よりよい授業デザインに向けて教師一人で検討、または複数人でディスカッションをするための材料になり得ることが示唆された。しかも、調査協力者の中には、教師自身の学習観や教育観の変容が見られ、ICTを活用したオンラインリソースの提供が教師の意識変容にも繋がり得る可能性が示された。教師の学習観の変容は、より能動的な教育実践、また教師が所属したコミュニティ(例えば、教師コミュニティ)における教育方法の共有にも繋がるであろう。

14) 本研究で述べるブレンディッド・ラーニングは、単に情報通信技術を利用した授業形態による学習ということではなく、最大限の効果を上げるためにICTを活用し、様々な方法を適切に組み合わせた (blend) 正規の授業であり、通信教育や遠隔教育やCALLとは根本的に異なっている(戸田2019, pp.108-109)。

15) 実際に、第5回「発音の達人になろう」では、発音の達人がオンラインリソースを活用して教室外で発音学習を継続していた事実が語られている。

## 5. おわりに

本研究では、韓国人学習者と教師にJPC（全5回）のコンテンツを利用後、5週間にわたり毎週1回報告書を提出してもらい縦断調査を実施し、報告書を分析した。その結果から、ICTを活用した言語教育により、一定の教育効果が得られたことが示された。学習者は字幕や音声翻訳ファイルを活用し、レベルを問わず自律学習を進めていくことができていた。また、講義内容が学習者のモチベーションの維持・向上に貢献することもわかった。また、韓国人教師3名によるケーススタディーとしてのJPCの視聴および評価から、韓国におけるオンラインによる日本語音声教育の可能性が示された。

本研究をとおして、今後のICTを活用した音声教育のあり方として、教師不在でも自律学習を進めていくための工夫や、学習継続のためのモチベーションの維持を促すことが重要な鍵を握っていることが明らかになった。また、教師それぞれが置かれている教育環境や担当科目に合わせてデザインされたブレンディッド・ラーニングにより、新たな授業内容として発展する可能性が見出された。さらに、教師自身にとって、コンテンツを自分の授業にどのように取り入れるかを検討する過程の中で、省察が伴われ、学習観および教育観にも変容が起こる点が示唆され、ICTを活用した日本語教育が教師教育として持つ意義も示唆された。

今後は、韓国の教育現場においても、ブレンディッド・ラーニングを取り入れた音声教育実践の教育効果を検証することが課題である。また、今回は報告書の分析を中心に行ったため、学習者の実際の発音については分析の対象外である。各回の講義受講前と受講後の学習者音声は、縦断調査をとおして収録してあるため、分析は今後の課題としたい。

### 【参考文献】

- 국가평생교육진흥원(2017) 「한국형 온라인 공개강좌(K-MOOC) 활용도 제고 방안 연구(최종보고서)」
- 기영화(2018) 「글로벌 MOOC의 학습형태와 한국형온라인공개강좌(K-MOOC) 학습경험분석」 『교육문화연구』 24-3  
인하대학교 교육연구소 pp.65-85
- 도다다카코(2010) 『일본어 발음』 넥서스
- 金東奎(2017) 「韓国におけるオンライン教育と韓国人日本語学習者の現状」 『早稲田日本語教育学』 23 早稲田大学大学院日本語教育研究科 pp.39-49
- 戸田貴子(2004) 『コミュニケーションのための日本語発音レッスン』 スリーエーネットワーク
- (2008) 「『発音の達人』とはどのような学習者か」 戸田貴子編著 『日本語教育と音声』 くろしお出版 pp.61-80
- (2016) 「MOOCs(Massive Open Online Courses)による日本語発音講座—発音の意識化を促す工夫と試み—」 『早稲田日本語教育学』 21 早稲田大学大学院日本語教育研究科 pp.87-91
- (2017) 「グローバル MOOCs における世界初の日本語講座」 川上郁雄編 『公共日本語教育学—社会をつくる日本語教育』 くろしお出版 pp.193-198
- (2019) 「ブレンディッド・ラーニング—新たなモデルの構築と音声教育実践—」 『早稲田日本語教育学』 26 早稲田大学大学院日本語教育研究科 pp.107-126
- 戸田貴子編著(2012) 『シャドーイングで日本語発音レッスン』 スリーエーネットワーク
- 戸田貴子・大久保雅子・千仙永・趙氷清(2018) 「グローバルMOOCsの相互評価における継続参加—日本語発

音オンライン講座の分析を通して一」『日本語教育』170 日本語教育学会 pp.32-46

edX “Japanese Pronunciation for Communication” <https://www.edx.org/course/japanese-pronunciation-for-communication> (検索日: 2020.3.17.)

TODA, T. (2012) The critical period hypothesis and phonological acquisition of Japanese, In C. Donohue, S. Ishihara & W. Steed (Eds.), *Lincom Studies in Phonetics: Vol. 8 Quantitative approaches to problems in linguistics*, München: Lincom Europa, pp.123-131

付記：本研究は、平成29-32年度JSPS科研費J17H02355基盤研究(B)「グローバルMOOCsにおける日本語発音オンライン講座の運用に関する実証的研究」による研究成果の一部である。

謝辞：本研究にあたって、調査にご協力いただいた先生方と学習者の皆様には、大変貴重なご意見をいただきました。この場をお借りし、深謝いたします。

〈 요지 〉

글로벌 MOOCs의 일본어발음 온라인강좌

- 한국인학습자와 교사를 대상으로 한 운용조사로부터 -

본 연구의 목적은, 글로벌 MOOCs의 일본어 발음 온라인 강좌(JPC)를 수강한 학습자와 교사의 분석 결과를 토대로, 한국의 ICT를 활용한 일본어교육의 가능성을 검토하는 것이다.

우선, 한국의 MOOCs의 현황을 개관한 후, 한국인 일본어 학습자 10명 (초급 5명, 상급 5명) 및 교육 경험이 다른 교사 3명을 대상으로 종단 조사를 실시했다. JPC (총5회)의 콘텐츠를 이용 후 5주간 매주 1회 보고서를 제출하는 조사를 실시했다.

한국인 학습자에 대해 1) 내용 이해 2) 연습 방법 3) 교육 효과에 초점을 맞추어 분석을 실시한 결과, 다음과 같이 밝혀졌다. 1) 총 5회를 통해 초급, 상급에 관계없이 약 70%의 학습자는 강의 내용을 “잘 알았다”고 자기평가했다. 그 이유로 자막 · 음성 번역 파일의 활용을 꼽을 수 있다. 2) 초급과 상급에서는 새도잉의 연습 방법에 차이가 보였다. 초급 학습자의 30%가 문자를 보면서 새도잉한 반면, 상급 학습자의 경우 대부분 문자를 보지 않고 새도잉을 했다. 3) 교육 효과로서 음성 학습 자세, 음성 학습관의 변화가 나타났다.

한국인 교사의 사례 연구에서는 1) 강의 내용에 대한 기유 지식과 교육 경험, 2) 리소스의 활용 방법에 초점을 맞추어 분석을 실시했다. 담당 과목 및 학습자 수준에 따라, 교사 A는 수업 보조 자료로 활용, 교사 B는 수업 · 레벨별 콘텐츠의 활용, 교사 C는 문화 소개의 측면에서의 활용을 검토하고 있었다.

위의 분석 결과를 바탕으로 ICT를 활용한 언어 교육은 한국의 일본어 교육 현장에 자율 학습, 블렌디드 학습, 교사 교육으로 이용될 가능성이 시사되었다.

논문분야: 일본어교육

키워드: MOOCs, ICT, 온라인 리소스, 발음, 자율학습

■ 도다 다카코(戸田 貴子)

早稲田大学 教授

toda@waseda.jp

■ 천선영(千仙永)

早稲田大学 教授

sunyoung\_chun@aoni.waseda.jp

■ 이토 사치코(伊藤 沙智子)

韓國外國語大學校 助教授

ito.sck@gmail.com

■投稿日	:	2019년	12월	31일
■審査開始	:	2020년	2월	5일
■審査完了	:	2020년	2월	19일
■掲載確定	:	2020년	2월	28일